
ドッペルゲンガー

広崎咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドッペルゲンガー

【コード】

N4043P

【作者名】

広崎咲

【あらすじ】

あなたの目の前に、あなたと全く同じ顔の人間が現れたら、あなたはどうしますか？

小林弘明の確信

あなたの目の前に、あなたと全く同じ顔の人間が現れた時、あなたはどうしますか？

小林弘明が最初に違和感を感じたのは大学で出会った友人との会話の中であった。

「よう、ヒロ！先週のコンパ盛り上がったよなあ。」

「…え？」

小林弘明は戸惑った。なぜなら、彼は先週レポートの作成に忙しく、彼からのコンパの誘いを断っていたからだ。

「どうしたんだ？寝起きか？ぼーっとしてるぜ。まー、いいわ。また今度飲み行こうな。」

「あ、ああ。また飲もうな！」

この時、小林はまだ「それ」の存在の可能性を疑っていなかった。彼は違和感を感じたものの、友人が自分をからかっているのだろうと判断したのだ。彼が「それ」の存在を疑い出したのは別の友人の話聞いた時だ。

小林は大学の講義を終え、いつもの居酒屋でバイトをしていた。彼が客の帰った後のテーブルを片づけていると、小林と同じくその日バイトに入っていた山本が手伝いに来た。

「おい、小林。お前、新しい彼女ができたのか？」

「はあ？何のことですか？」

山本はテーブルを拭きながらニヤニヤと笑みを浮かべている。

「おいおい、とぼけなくていいんだぜ。昨日、めっちゃくちゃかわいい女の子と街歩いてたじゃないか。お前、藤子ちゃんとは別れたのかよ。」

「藤子とは仲良くやってますよ。山本さんの見間違いじゃないですか？俺は昨日は家でずっとテレビ見てましたよ。」

「なんだよ。じゃあ、昨日の女の子俺に紹介してくれよな。」

そう言い残すと、山本は自分の職場へ戻って行った。小林弘明はその場で呆然としていた。2人目だ。今日1日で2人の人間に俺がいないはずの場所で俺を見たという。…もしかしたら。小林弘明のその不安はその日のうちに確信に変わることになる。

その後、バイトに集中できなかった小林は仕事中に何度も小さなミスをした。なんとか仕事を終えた小林は自分の携帯に藤子からのメールが入っていることに気付いた。

バイト終わった後、家来れる？大事な話があるの。

なんだよ？話つて。彼は不安に駆られながら急いで職場からそのまま彼女の家へと向かった。川沿いにある古びたアパート。この2階の一番奥に彼女の部屋がある。小林はドアの前で息をととのえてからインターフォンを鳴らした。一瞬の間の後にドアが開く。

「バイトお疲れ様。上がつてよ。」

藤子はいつも通りのお気に入りのお気に入りのパーカーを着ていた。だが、彼女の顔にはいつも通りの笑顔はなかった。小林がリビングのクッションに座ると、藤子は対面の位置に腰かけた。そして、ゆっくりと口を開いた。

「別れよう。」

小林は言葉を失った。無理もない。2年近く付き合った彼女にいきなり別れを切り出されたのだ。

「…え？ちよつと待って。なんで？俺たち結構うまくやってきたじゃん。それが、なんで、こんないきなり。おかしいでしょ。」

「おかしいのは弘明の方だよ。…私に黙って浮気してたでしょ！私は、もう、あなたのことを信じられない。」

藤子は震えながら絞り出すような声でそう告げた。目からは涙が溢れている。しかし、小林はまったく身に覚えがないことだ。

「浮気！？何のことだよ。俺、そんなことしてねえよ。」

しかし、この時小林の脳裏にはバイト中の山本との会話がよみが

えっっていた。戸惑う彼を藤子は涙にぬれた眼で睨みつけた。

「この写メ見てもそんな嘘言えるの？」

藤子は自分のケータイを小林に手渡した。小林は恐る恐るケータイの画面に目をやる。そこには、自分そっくりの人間、いや、小林弘明そのものが女の子と2人きりでホテルへ入る様子が写されていた。その瞬間、小林弘明は確信した。

俺のドッペルゲンガーが現れた。

山岸拓哉の興味

小林弘明は藤子の別れたいという申し出を受け入れた。今の彼には写メに写っている男が自分のドッペルゲンガーだと証明する方法が無いのだ。すべて解決したら必ず戻ってくる心で誓い、彼はすすり泣く藤子を残り、彼女の家を後にした。

自宅に着いた彼は、今の現状を一通り紙に書き出してみた。

現状？ 俺のドッペルゲンガーが現れわれた。以下、そいつをXと呼ぶ。

現状？ Xは加藤主催の飲み会に参加した。

現状？ その後、加藤は俺に何の変哲もなく話しかけてきた。

現状？ Xは俺の知らない女と関係を持っている。以下、その女のことをYと呼ぶ。

このことから考察できるのは、まずXは外見だけでなく、言動・記憶も俺のコピーであるということ。これは、友人同士の飲み会に何の違和感もなく参加していたことから推測できる。また、Xにたどり着くにはYが重要な鍵を握っているということだ。Yについては、俺や藤子、山本と面識がないことが分かっている。ここまで考えたところで、小林はあることを決意していた。あの男を頼ろう。これから、おれが相手にしようとしているのは、訳のわからない常識の通用しない奴だ。そんな時はこっちも訳の分からない常識外れの奴を味方につけるしかない。

翌日、小林弘明は大学の心理学棟の303号室を訪ねた。小林がノックすると、研究室の中から低い声の返事があった。一応、前日に送ったメールを読んでいてくれたようだ。小林がドアを開けると

部屋の中は本の山で埋もれていた。数千冊もの本が絶妙なバランスで部屋の中で積み重なっている。それらの本に触れないように気をつけながら部屋の奥へ進むとようやくその男の姿が目に入った。男はソファーに横たわり、分厚い英字の本を熱心に読んでいた。ぼさはその頭に機能性しか考えていない黒ぶち眼鏡。しかし、その奥には理知的な瞳が光っている。まったく変わってないな。と、小林は思う。

「久しぶりだな、小林弘明。僕は今忙しいから、大した話じゃなかったら帰ってもらうぞ。」

この男が山岸拓哉だ。犯罪心理学専攻の大学3年生。小林弘明とは大学1年の夏休みに一緒にある事件に巻き込まれたことで知り合った。人は彼のことを変態と呼ぶ。あるいは、天才と。

「きつと、君の興味を引くと思うよ。」

山岸は英字の本のページをめくりながら言った。

「手短に頼むよ。」

どうせ興味ないから、といった態度だ。小林は山岸の向かいのソファーにゆっくりと腰かけつつ言った。

「実は、俺のドッペルゲンガーが現れたんだ。」

山岸拓哉は読んでいた本を机の上に放り投げた。

「へー、興味深いな。聞かせてくれ。」

3つの可能性

小林の話を山岸は熱心に聞いた。そして、小林が話し終わると同時に山岸は語り出した。

「ドッペルゲンガーは昔から世界中で観測されている現象なんだ。有名どころじゃ、元アメリカ大統領のリンカーンや作家の芥川龍之介なんかも自身のドッペルゲンガーを見たと言っている。」

「へー、そうなのか。」

「ただな、気をつけるよ。」

「何をだ。」

「自分のドッペルゲンガーに会うと死ぬらしいからな。」

山岸の言葉に小林は思わず後ずさってしまった。そんな小林の様子を見て山岸は噴出した。

「はは、そんなに怖がるなよ。あくまで言い伝えだからな。まー、茶でも飲んで落ち着け。」

山岸はポットでお茶を作って小林に出した。小林はそのお茶をすすする。

「それを先に言えよ。」

「悪かったよ。それで、君がXと呼んでいる奴の正体には僕が考え

る限り3つの可能性がある。」

「教えてくれ。」

山岸拓哉はボールペンをくるくると手の上でまわし始めた。彼が考えをまとめるときの癖だ。

「？君のドッペルゲンガーが現れた。？君にものすごく似たそっくりサンがこの近くに引っ越してきた。？君に比較的近い体型の男が君そっくりの顔に整形した。以上の3パターンだ。」

小林は山岸の思考スピードに圧倒されていた。そんな小林に構わず山岸は続ける。

「さらに、この？パターンのいずれかを特定することによってXが君の付近に現れた目的が分かる。」

「どっついうことだ？」

「例えば、Xの正体が？の場合は君に死期を告げるためだ。これはドッペルゲンガーについての文献に書かれていることだ。？の場合はおそらく全くの偶然になるだろう。？の場合は、Xが君と入れ替わることが目的だろう。」

山岸の考察を聞いて小林弘明はしばらく黙りこんだ。その後、小林がぼつりと言った。

「…？の線は薄いだろっつな。」

「そうだな。Xは加藤主催の飲み会に参加していることから、まず

「？は無いだろつ。」

「あと、？の場合のXの目的がなんで俺と入れ替わることだってわかるんだ？」

「もし、Xが君そっくりに整形したのだとしたら、Xの裏には巨大な組織が付いていることになる。」

「まあ、一般人が俺そっくりに整形する意味やメリットなんて何も無いからな。」

「おそらく、将来Xは君の身分を利用して組織のために何かをする。」

「俺の身分？俺って何の特徴もない平凡な家庭に育った平凡な人間だけ？それに何かやるってなんだよ？」

「落ち着いてくれ。まず、君の身分というのは、まさにその平凡な人間のことだ。？の場合、Xはおそらくかなり大きな組織に入っている。宗教団体や政治団体、暴力団体などだ。そしてXはその組織から数千万という金をだしてもらい、君そっくりに整形した。そして、君と入れ替わり君の平凡な身分を手に入れることを欲している。」

「そうか。つまり、Xが俺の身分を手に入れた後にとんでもない事件を起こしても、組織には傷はつかない。」

「その通りだ。ただの一般人が起こした事件となり、その組織には結びつかない。しかし、そのためには、君を殺しておく必要がある。」

「

「なんでだ？別に俺が生きていてもいいんじゃないか？仮に俺がその事件まで生きていたら、Xは犯行後に身を隠して整形でまた自分の顔に戻せる。そうすれば、事件の責任はすべて俺にかかり、Xはのびのびと生きていける。」

「確かにお前に罪を着せるという可能性もあった。だが、その可能性は0%だ。」

「なんで断言できる？」

「今、お前がXの存在に気付いているからだ。Xの目的がお前に罪を着せることならまず、お前に自分の影を感じさせない。事件発生時に初めてお前の前に姿を現した方が都合がいいだろ。」

「…確かにそうだな。じゃあ、今、俺が奴の存在に気付いているということとは…。」

「おそらく、近日中にお前を始末するつもりなんだろ。」

ごく。小林の唾を飲む音が研究室に響く。

「山岸の考えじゃ、どのパターンの可能性が強いと思うんだ？」

「率直に言って、？が0.9%、？が0.1%、？が99%だ。」

合言葉

小林弘明は恐れ慄いた。山岸拓哉の考察ではXの正体は巨大組織の人間であり、自分はその組織に命を狙われているということになる。

「短い人生だったな。」

「何もつ諦めてんだよ。」

「だって、正体不明の巨大組織に命狙われてんだぜ？もう無理だろ。」

「落ち着けよ。2年前だって最後まであきらめなかったから、僕たちはまだ生きてるんじゃないか。」

「…そうだな。あの時だって何とか生き残ったんだ。」

「それに、おそらく組織の人間は手を出してこない。」

「なんでだよ？」

「おそらく今回の件は、その組織は全く関係してないという既成事実がほしいはずだ。なぜなら、その組織は近い将来Xを使ってとんでもない事件を起こすはずだ。Xはその際君の身分を使う。その君の近辺に組織の人間が現れたという事実を組織は絶対につくらない。だから、君を殺しに来るとしたら・」

「XかYか。」

「その通りだ。Ｙも十中八九その組織の人間だろう。もちろん、整形したな。」

「じゃあ、おれはこれからどうしたら」

ここまで来て、山岸拓哉ははっと息をのんだ。

「ちょっと、待て！」

山岸は小林に鋭い目を向けた。

「君、本当に僕の知っている小林弘明か？」

「なに言ってるんだよ。俺は正真正銘の小林弘明だ。ドッペルゲンガ
ーなんかじゃない。」

小林は真つすぐに山岸の目を見返した。数分間近く、山岸は小林の目を見つめ続けた。

「たしかに、君は僕の知っている小林弘明の様だな。あの時と同じ目をしている。」

「良かったよ。信じてもらえて。」

「よし、そうと分かれば確認したいことがある。」

そう言つと、山岸は自分の携帯を取り出し、いじり始めた。すると、小林の携帯が鳴りだした。それに出ようとすると小林を山岸が制した。

「出るな！」

数十秒、小林の携帯が鳴り続ける。それを確認した山岸は携帯を切った。

「どうやら、Xは君の携帯まではコピーしていないようだな。」

「なるほど。」

「これから、君との連絡は携帯の電話でする。」

「分かった。」

「あと、君はYの顔を覚えているか？」

「ああ、この目に焼き付けてきた。」

「それじゃあ、これから僕はXについて調査していくから、君はYについて調べてくれ。ただし、絶対に1人で行動しないで。必ず誰か一緒にいてくれ。」

「オツケー。じゃあ、写メにとられた街の方に早速行ってみるわ。」

「ちょっと待て。最後に、君とXを見分けるために合言葉を決めておこう。」

「分かった。」

「じゃあ、僕が君と出会ったたびに時間を尋ねるから、その度君は必

ず19時19分と答えてくれ。」

「19時19分か…。分かった。俺たちにはぴったりの合言葉だな。」

そう言うと、小林弘明はさっそうと研究室を後にした。ほどなくして山岸拓哉も学内へ調査へと向かった。

「…19時19分ね。」

薄暗い廃墟の一角でXがほほ笑んでいた。小林弘明は気づいていない。自分の携帯に盗聴器が仕掛けられていることに。

神谷圭子の発見

研究室を後にした小林弘明はYを調査するために街に向かおうとした。だが、そこで山岸拓哉の忠告を思い出した。「必ず誰かと共に行動しろ。」誰か、と言われて小林がすぐに考えたのは1人の女性だった。おそらくは、山岸も彼女のことを言っていたのだろう。小林弘明は大学へと引き返し、工学部棟の研究室へと向かった。そして、部屋の中に入ると白衣をまとったショートカットの女性がはコーヒーを淹れていた。

「久しぶりだね、小林君。ドッペルゲンガーが出たんだって？山岸君から聞いたよ。」

彼女が神谷圭子だ。小林、山岸、神谷の3人は2年前共通してある事件に巻き込まれた。その時以来、彼らは固いきずなで結ばれている。

「ああ、かなり厄介なことになってるんだ。」

それから小林は先ほどまでの山岸との話し合いの経過を大まかに説明した。神谷圭子は所々で相槌を打ち、質問をし、話を聞き終えた。

「はい、また大変なことに巻き込まれちゃったんだね。で、私はそのYを探す手伝いをすればいいわけだ。」

「まあ、そう簡単にはいかないだろうけどさ、どうか頼むよ。神谷の力を貸してくれ。」

小林弘明は神谷圭子に手を合わせて見せた。そんな小林の様子をしばらく神谷は黙って見ていた。

「いいよ。私が今生きているのも、小林君と山岸君のおかげだしね。」

神谷は笑顔で快諾した。

「ありがとう。ただ、それを言ったら俺や山岸が生き延びられたのも神谷のおかげなんだぜ。」

小林は苦笑しながら言った。

「まあ、そうかもね。じゃあさ、実験もちょうどきりがいいところだし、今から行ってみようよ。」

「実験ってそのへんてこなゴーグルと関係あるのかい？」

小林は机の上に置いてあるおびただし数の配線がつけられたゴーグルを指差す。

「うん。そうなんだ。小林君さ、電磁線って知ってる？」

「ああ、電化製品から出てるって言うあれだろ。」

「そうよ。その電磁線っていうのはね、それぞれが決まった形で出てるの。で、このゴーグルをかけるとね、それらの電磁線を見ることのできるの。」

そう言うと、神谷は小林にゴーグルを手渡した。

「かけてみて。」

神谷に促されて小林はゴーグルを装着する。

「うわっ、すげー！」

小林がゴーグルを通して見た世界は青い線で溢れかえっていた。

「でしょでしょ！」

「ホントすげーな。あれ、神谷のポケットからも電磁線でてるぜ。」

ああ、これ？と言って神谷はポケットから中身を取り出す。

「ケータイだよ。」

「へー、ケータイの電磁線って綺麗な円形なんだな。…あれ？」

「どうしたの？」

「ちょっと、俺の携帯の電磁線がおかしいんだ。見てくれ。」

神谷は小林からゴーグルを受け取るとすぐに装着し、小林のケータイをのぞいてみた。

「…ホントだ。ケータイの中に別の電子物が入っているわ！」

そう言うと神谷は研究室の工具を使って小林の携帯を分解し始める。携帯のメモリー機能をつかさどるところの横に、5ミリ四方ほ

どの黒い直方体の物体が仕掛けられていた。

「な、なんだよ。これ？」

神谷圭子はその黒い物体を取り外し、ペンチで破壊した。

「盗聴器よ。」

「…マジか。」

「動かないで。ちょっと他に何か仕掛けられていないか見るわ。」

神谷はゴーグルをかけたまま神谷の全身や持ち物をくまなくチェックした。

「ふう、どうやら他にはないようね。」

安心した表情を浮かべる神谷とは対照的に小林は青ざめていく。

「…合言葉。」

「え？」

「山岸が危ない！」

対峙

小林弘明が神谷圭子の研究室へと向かった頃、山岸拓哉は大学構内でXの手掛かりを探していた。健康サンダルにダボダボのジーンズ、そして着古したパーカーによくわからない色のマフラー、耳にはイヤホンをしている。山岸は広場、図書館、食堂と比較的學生が集まりそうなところを順に回って行った。この時、山岸は自分が尾行されていることに気付いていなかった。山岸の後方20メートルほどのところを先ほどからずっとその男はつけていた。

一方、その頃小林弘明は神谷の研究室で焦っていた。

「早く山岸に知らせないと！俺たちの合言葉がXにはれているってことを・・・！」

それを聞いた神谷は青ざめる。

「合言葉なんて決めてたの？しかも、それがXにはれてるって！」

「ああ、相当不味い。さっきの会話で、山岸はかなり深いところまであいつらについて考察してた。Xは山岸のことを危険分子とみなしてるだろう。きっと、始末しに来るはずだ。」

「とりあえず、山岸君の携帯にかけてみたら。」

「・・・そうだな。よし。」

小林弘明が自分の携帯を取り出そうとしたちょうどその時、小林

の携帯が鳴りだした。

山岸は一通り大学構内を周り、研究室裏のベンチに座りタバコをふかしていた。相変わらず耳にはイヤホンをつけたままだ。音楽でも聞いているのだろう。その時、山岸は不意に背後から人の気配を感じ、とっさに振り向いた。そこには、小林弘明が立っていた。

「…どうしてここにいるんだ。街に調査に行っただんじゃなかったのか？」

山岸は煙を空に向かってはきだした。

「ああ、ちょっと言い忘れていたことがあってな。重要なことなんだ。」

「そうか。それは聞いとかないな。だが、その前にひとつ尋ねていいか？今の時刻を教えてください。」

すると、男はニヤツと笑みを浮かべて応える。

「…19時19分だ。さて、話っているのはだな、」

隣に腰かけようとするその男を山岸は手で制した。

「もう一つだけ聞いていいか？君の名前を教えてください。」

男は戸惑いつつもその場で答える。

「何言っただよ？ふざけてんのか？俺の名前は小林弘明だ。」

おどけて笑うその男をじつと山岸は見据える。分厚い眼鏡のレンズの奥で理知的な瞳が光っている。

「…違う。僕が知りたいのは君の本当の名前だ。」

山岸がそう言い放つと同時に、男の顔から表情が消えうせた。

「なぜ、分かった？服装も顔も行動パターンも完ぺきだったはずだ。それに合言葉も。」

山岸は腰かけていたベンチから立ちあがりXと対峙する。そして耳からイヤホンを外しながら言った。

「ああ、確かに完ぺきだったよ。容姿、挙動、合言葉。ただ一点、本物にあつて偽物にないものを僕は知っている。」

山岸はイヤホンのコードをたどりはじめる。

「なんだ？何が足りなかった？」

イヤホンのコードの先には携帯が繋がっていた。

「携帯さ。この携帯は今、本物の小林弘明と繋がっている。しかし、君は電話に出ていない。つまり君が偽物だ。」

Xは山岸を睨みつけつつ舌打ちをした。

「じゃあ、なぜわざわざ合言葉なんか決めただ？」

「あれは君を油断させるための罠だよ。僕は小林から今回の話を聞いた時点で、今自分たちの会話が盗聴されている可能性に思い当たった。xは小林弘明の言動を完ぺきにコピーしているという話から気付いた。小林の行動は盗聴、もしくは盗撮されているとね。」

「ということは、あの時の会話はすべて……。」

「君を誘い出すための罠だ。僕は君から声をかけられた時点で君にばれないようにポケットの中で携帯を操作し、小林に電話をかけた。そして、本人が応答するのをこのイヤホンで確認したってわけだ。」

「くっ、何て男だ。」

「今度は僕が尋ねる番だ。君の所属する組織は何だ？そして、その組織の目的は何なんだ？」

「そんな質問に答える訳ないだろう。」

「じゃあ、別の質問だ。おそらく、君は小林と完全に入れ替わった後に組織のために死ぬのだろう」

。君は死が怖くないのか？」

xは不敵に笑って見せた。

「主のためにこの命をささげることが榮譽なことなのだ。いいか、山岸拓哉。今回は警告しに来た。これ以上、小林弘明に関わるな。命を落とすことになるぞ。」

山岸が反応するよりも早く、xは自分のカバンから布を取り出し山岸の口にあてた。

「…くそ、意識が、…。」

山岸はその場に倒れこんだ。

黒幕

「おい！しっかりしろ！」

山岸拓哉が目を覚ますと小林弘明が必死の形相で彼の肩をゆすっていた。隣には神谷圭子が泣きそうな表情でたたずんでいる。

「…本物か。」

山岸はだるそうに体を起こす。大丈夫か？と小林が肩を貸した。起き上がると、ポケットから煙草を取り出し一服した。そんな山岸の姿を見て神谷はわっと泣き出した。

「よかった。生きててホントに良かった。」

それを見て山岸は戸惑う。

「おいおい。泣かないでくれよ。」

それに対して小林が噛み付いた。

「いや、今回はお前が悪いぞ！なんでお前はいつも自分ひとりで危険を冒そうとするんだよ？」

神谷も泣きながら同調する。

「そうよ。山岸君から小林君の携帯に着信あってから大学中を探しまわったんだから。」

「やっと、見つけたと思ったたらお前倒れこんでるしさ。Xに殺されたかと思ったよ。」

2人の勢いにさすがの山岸もたじたじになった。

「分かった。僕が悪かったよ。ゴメン。だから、2人とも落ち着いてくれ。」

平謝りする山岸をみてようやく神谷は泣きやんだ。小林もなんとか納得した様子だ。

「ところで、2人と今後のことについて話し合いたいんだ。」

3人は山岸のアパートへと移動した。大学から徒歩で15分。4畳半程の小さな部屋だった。山岸が適当に座つてと2人を促す。全員がなんとか狭い部屋に座つたところで山岸が口を開いた。

「小林、盗聴器は外したか？」

小林がジーンズのポケットから携帯を取り出し、山岸に手渡す。そして、神谷の方を顎で示した。

「ああ。神谷が発見してくれた。その後、調べてみたが他に盗聴器は無かった。」

神谷も小林の言葉にうなづく。その様子を見て山岸は静かにしゃべりだした。

「先ほどのXの会話から黒幕がわかった。」

「え!？」

小林と神谷が思わず山岸の顔を凝視する。構わずに山岸は続ける。

「カイル教だ。」

カイル教。それは、21世紀初頭から突如として現れた新興宗教団体。東京、大阪、名古屋、札幌、仙台、広島、福岡など全国の主要都市の駅地下に「みんなの部屋」と呼ばれる集会所がある。そのことからカイル教の幹部はJRの幹部という噂も流れている。駅で学校や会社に行くのに疲れた人々が「みんなの部屋」へと向かうようになった。そして、その部屋に行ったものは場所を提供される間ずっとカイル教についての講演を受けることになる。現在、カイル教信者は日本全国で560万人に達していると推測されている。信者の中には各界著名人や政治家も含まれている。また、先の参院選で急速に議席を伸ばした国民平等党の母団体はカイル教という話もある。

「カイル教だつて!？」

「なんで分かったの？」

「プロファイリングさ。僕は日々世界中の犯罪者の心理分析を行っている。殺人狂の連続殺人犯から某国のスパイ、政治犯などなど。その中からXの言動とマッチするもの。それは信者による犯罪だ。ここまでで、Xの裏には宗教団体が潜んでいると推理した。そして、俺はXにかまをかけた。」

「なんて？」

「俺はXに対して『死ぬのが怖くないのか?』と尋ねた。するとXは『主のために』という文言を用いて答えた。自らの教祖を『主』と表現するのはカイル教だけだ。」

山岸の推理に神谷と小林はしきりに感心する。

「さすが、山岸くん。相変わらずの推理力ね。それで、これからどうするの?」

神谷の問いかけに山岸は笑みを浮かべ小林を見る。

「君は分かっているよな。」

山岸の問いかけに小林も笑みを浮かべる。

「ああ。」

小林弘明の才能

小林弘明は平凡な人間だった。中肉中背、顔も特にかっこいいというわけではなく、運動神経も人並みである。その平凡さゆえカイル教に目を付けられたのであるが。しかし、そんな小林には知られざる才能があった。そのことを知るのはわずか2名。神谷圭子と山岸拓哉の2人だけである。

「パソコン借りるぞ。」

そう言うと小林は山岸の部屋のパソコンを起動させた。その様子をみて神谷がはっとする。

「まさか、今からハッキングするつもりなの？」

小林弘明の才能。それはハッキングの才能だった。それもとんでもない程の。彼がハッキングを初めて行ったのは中学2年生の時だった。中学の中間試験の問題を入手するためにダメもとで学校のパソコンにアクセスしたのだが、彼はその時、難なく学校のセキュリティをくぐりぬけてしまった。そのことがきっかけで彼は時折ハッキングを試みるようになった。県庁の機密情報や警察の裏事情など、どんどんとハードルを上げていったが、彼は難なく突破してしまっただ。もつと難易度の高いものは無いのか？そう考えるうちに彼は着実に昇り詰めていった。そして、高校2年の時、彼はついに世界最難関のセキュリティに挑戦した。それはアメリカ大統領府にある核爆弾のスイッチのセキュリティである。彼はそれをも成功させた。彼はその時点でハッキングに興味を失った。それ以来、彼はハッキングを封印したのだ。「核のスイッチに触れた男がいる。」という噂を残して。

「どこから当たればいい？」

小林は山岸に尋ねる。

「カイル教だ。」

小林はパソコンを操作する。すると画面上には数列が所狭しと浮かび上がってきた。小林はさらっと流し読みしただけでパスワードを入力していく。そして、彼がエンターキーを押すとその画面は開かれた。

Restart 2011 4 8 HTNKTTTIYCTSK
ONHKK WKJ, MARCH, KKHR

小林弘明は舌打ちをした。

「くそ！機密文書の内容まで暗号にしてやがる。」

傍観していた山岸が身を乗り出した。

「暗号か。面白そうだな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4043p/>

ドッペルゲンガー

2011年10月7日17時26分発行